

「ぬいぐるみおとまり会」の実践と評価

梅宮 朝雪

「ぬいぐるみおとまり会」とは、図書館で幼児のぬいぐるみを預かり、「ぬいぐるみが夜の図書館で探検・仕事をし、持ち主に絵本を選んだ」という設定でぬいぐるみの写真や絵本を提供する活動である。本研究では「ぬいぐるみおとまり会」の実践の効果の検討を行うことを目的とした。仮説としては、次の2点を検討した。仮説 1-1 は「『ぬいぐるみおとまり会』に参加した幼児が絵本により関心を持つようになる」、仮説 1-2 は「『ぬいぐるみおとまり会』に参加した幼児の保護者の絵本に関する活動が盛んになる」、仮説 2-1 は「『ぬいぐるみおとまり会』に参加した幼児が図書館により関心を持つようになる」、仮説 2-2 は「『ぬいぐるみおとまり会』に参加した幼児の保護者が図書館に関する活動が盛んになる」であった。

本研究は、牛久市の保育施設 5 園に通う幼児 96 名を対象として、実施群 (59 名) 対照群 (37 名) に分けて行った。質問紙の回答は保育施設を通じて保護者に依頼した。質問紙は予備質問紙・事前質問紙・後日質問紙 (対照群には事前質問紙 2)・感想シートの 4 種類を用いた。実施群に対しては「ぬいぐるみおとまり会」の前後に、対照群に対しては実施群と同時に調査を行うことで、2 回の調査の項目ごとの差得点を算出し、これを用いて対照群よりも実施群の差得点が有意に高いかを検討した。有効回答件数は 76 名 (実施群 45 名、対照群 31 名) (79.2%) であった。

「ぬいぐるみおとまり会」の実施にあたっては、「ぬいぐるみおとまり会」初日に研究実施者が保育施設でぬいぐるみを預かり、研究実施者とぬいぐるみが牛久市立中央図書館に移動して写真撮影を行い、最終日に保育施設で幼児にぬいぐるみの返却とおはなし会を行った。

分析の結果、絵本への関心 (読み聞かせをせがむ頻度、幼児が絵本の話をする頻度) (仮説 1-1) および絵本に関する活動 (保護者が絵本を読み聞かせる日数、保護者が絵本を読み聞かせる冊数) (仮説 1-2) では実施群と対照群で有意差は見られなかった。一方、図書館への関心 (幼児が図書館の話をする頻度、幼児が図書館に行きたいと言う頻度) (仮説 2-1) のうち、幼児が図書館の話をする頻度と、図書館利用 (保護者が図書館で幼児のために借りる冊数) (仮説 2-2) では、保育園に通う幼児においては、実施群の値が対照群より有意に高く、仮説 2-1 「『ぬいぐるみおとまり会』に参加した幼児が図書館により関心を持つようになる」が支持された。また、「ぬいぐるみおとまり会」への感想では、「絵本や写真を見て喜んでいました」などいずれの群でも高評価であることが確認された。

本研究では項目によって有効回答数が少ないものがあったため、今後、より多くの幼児を対象として「ぬいぐるみおとまり会」の効果を検討することが望まれる。

(指導教員 鈴木佳苗)